

2016 年春の台湾文化交流と介護視察 報告

菊池小百合、関口昌利 (佐久大学信州短期大学部)

It is reported cultural exchange and care inspection in Taiwan in the spring of 2016

Sayuri Kikuchi, Masatoshi Sekiguchi

(Department of Shinshu Junior College at Saku University)

要旨: 佐久大学信州短期大学部では、アジア圏における高齢者（特に認知症者）ケアの資質向上・人材育成を目的に、2015 年 1 月より台湾 Asian Wise 有限公司（東アジア人材提供、介護日本語教育提供、医療通訳人材提供、日台介護コンサルタント、翻訳）との交流事業を実施している。過去 2 回台湾からの研修生を受け入れ、大学での講義・演習、ジェイエー長野会福祉施設実習、佐久地域での文化学習等を実施し、研修生からは高い評価を受けている。2016 年第 2 回訪日研修後、今後の台湾との交流事業をより有意義なものとするため、佐久大学信州短期大学部教員 2 名、学生 1 名が訪台し、台湾で学ぶ学生及び病院・施設職員との交流を実施した。台湾で得られた様々な知見は、今後の日本・台湾での人材育成、交流事業に寄与すると考える。

Keywords: 台湾 人材育成 交流事業

I. はじめに

2016 年 3 月 16 日から 3 月 20 日まで、台湾東部に位置する花蓮県に滞在し、介護施設見学および慈済技術大学で医療日本語を学ぶ学生に対し、日本の介護技術、日本の看護と介護に関するミニセミナーを実施した。翌日には地域の中心的な医療を担い 1000 床のベッド数を持ち、福祉施設も展開する門諾病院において、日本の介護と認知症に対する取り組みについてセミナーを実施した。

両日ともに、日本の介護技術及び認知症に対する取り組みに関して多くの質問が寄せられ、日本と台湾の文化的特徴も含め、活発な意見交換を行うことができた。

II. 台湾の介護事情

1. 台湾の民族事情

台湾は国土面積 36,193km²と、日本の九州地方の国土の中に、15 を超える多民族が暮らす国である。若者の多くは都市部で生活を送っているが、今も民族の伝統を守り山中で暮らす人々も多くいるという。訪れた慈済技術大学 (図 1) では、民族の伝統を守る為、大学内に原住民博物館を持ち、様々な民族の生活の姿を、体験を通して学ぶ事ができるよう展示を行っている。

また台湾は、過去に日本統治の時代があり、花蓮には日本が建造し管理を行った森林伐採施設が現在も残され、観光地となっている。その施設には日本の昭和時代を思い起こさせる生活様式が多く残されていた。

親日的な国民が多く、日本の伝統的な食材である「餅」は、台湾文化の中で形を変え今も好まれているという。現在も日本語教育の影響から、日本語を話す 80 歳代以降の高齢者が健在している。

多民族博物館 (図 2) 見学では、様々な民族が歩んできた歴史と伝統を尊重し、将来にわたって残していこうとする国民の姿に感銘を受けた。



図 1. 慈済技術大学



図2. 多民族博物館

2. 台湾の介護事情

台湾の高齢化率は12.5%（2015年）と報告されているが、現在の人口構造を勘案すると、日本とほぼ同様少子高齢社会となることが明らかとなっている。また高齢者人口の増加、家族形態の変化、認知症高齢者の増加が今後の課題とされている。

国民の生活に関しては、生活保障として日本で行われている年金制度は、全国民対象ではなく、低所得者に対する施策も行われている。

今後の介護需要の増加も含め、介護保険制度のパイロット事業^{注1)}が行われ、実施に向けての検討が行われている⁽¹⁾が、その中でも介護人材の課題として、外国人ヘルパー導入の課題がある。過去2回訪日研修^{注2)}に参加した研修生の情報によると、研修生の自宅に外国人労働者が居住し、介護の知識と技術をほとんど持たず、介護を実施しているとの事である。

台湾では介護を担う人材に対する専門資格はなく、また教育システムも不十分であることから、介護環境と人材育成が大きな課題となっている。

Ⅲ. 慈済技術大学での医療日本語学科（以下廣橋ゼミとする）学生との交流

1. 慈済技術大学廣橋ゼミ交流1限目

訪台2日目に行われた慈済技術大学では、佐久大学信州短期大学部2年生をモデルとし、介護場面での声掛けと、利用者に寄り添い介護を行う意義に関して講義が行われた。介護は専門的知識と技術を必要とした専門職である事を前提とし、介護専門職としての基本的な心構えと、利用者に対する配慮及び、根拠に基づいた介護技術の必要性等に関する内容であった。

特に声掛けに関しては、台湾の介護実践の中では積極的に行われていない状況であるとの事から、改めて声掛けと利用者（患者）本人による同意の必要性に関して、学生から今後は意識しておこなっていきたいといった、率直な感想を聞くことができた。

《講義の様子》

1) 「介護の声かけと寄り添い」(図3)

担当 関口昌利・モデル小林仁哉

2) 佐久大学信州短期大学部介護福祉学科の実技試験過去問題を例に声かけのポイントを説明(図4)

《講義で使用した実技試験問題》

「Aさん(80歳)は、右上下肢に麻痺があり、日常生活動作に一部介助が必要です。居室のベッドで横になっているAさんを、レクリエーションの目的で、リビングルームのテーブルまで誘導してください。室温が低いので、上衣を着用します。着席したら、好みのレクリエーションが楽しめるように準備するまでの介助をしてください。Aさんは、声かけに対して「はい」と返答するのみです。」

ポイント

○挨拶・名前の呼びかけ・自己紹介・体調確認・尿



図3. 講義「介護の声かけと寄り添い」



(a) 声掛けの演習



(b) 杖を使用した歩行の介助



(c) 廣橋ゼミ生(男子)の実技1

最初の挨拶・視線を合わせる・名前呼びかけ・自己紹介
図4. 佐久大学信州短期大学部介護福祉学科の実技試験過去問題を例に声かけのポイントを説明

意の確認・説明と同意

○介護の原則：①自立支援＝残存能力の活用②安全
安楽＝患側（麻痺側）の保護・転倒転落強打の防
止③個人尊厳＝自己選択・自己決定・介護のイン
フォームドコンセント

これらを中心に演習を行った。

模範演習実施後、実際に廣橋ゼミの学生の中から希望者を募り演習を行った。支援を行う際は利用者（患者）に視線を合わせ、支援の内容を認識してもらうことが重要である等の理解が深まった演習であった。

2. 慈済技術大学廣橋ゼミ交流2回目

日本の看護師誕生の歴史と介護福祉士誕生の経緯及び、専門職としての介護福祉士制度に関して概要を説明し、看護と介護が連携し利用者（患者）をケアする意義について講義を行った。台湾には介護を職業とする介護職が



図5. 講義「日本における看護と介護」

存在するが、先に述べたように介護の専門資格はなく、日本の介護福祉士制度に関しては、興味・関心を示す姿がみられた。参加学生は台湾での看護師資格をすでに取得しており、更なる資質向上をめざし学習を継続していることから、日本の介護及び介護福祉士に対する認識が深まったと思われる。

《講義の様子》

1) 「日本における看護と介護」(図5)

担当 菊池小百合

〈看護と介護の現状についての講義〉

日本の看護と介護の姿に関して、①看護・介護ともに行っている援助を Care と呼ぶ。②看護・介護の対象は、生活をしている人間。③人間は、生活を通して健康を維持する。④看護師・介護福祉士の独自性＝それぞれの専門性を尊重し協働して Care を行う。⑤情報を共有し、多職種が連携し Care を行う。を骨子とし講義を行った。

2) 認知症の人に対するケア(図6)

事例をもとに、認知症の人の気持ちを踏まえた声掛けについて演習を行った。

〈学生に提示した事例〉

「朝目が覚めると、どこか見慣れない部屋にいる。「ここはどこなのだろう。自分はなぜここにいるのだろう。どうやってここに来たのかな。」と、何も覚えていない自分に気づく。不安になったので廊下に出てみる。両側に同じような部屋が並んでいて高齢者がベッドに寝ている姿が目立つ。同じ服を着た若い人たちが忙しそうに動き回っている。「ここは病院なのか」と思う。「おはよう B さん。」と制服を着た若い人に声をかけられた。とっさに「おはよう。」と答えてみた。「あの若い人はなぜ自分の名前を知っているのか。ここはどこなのか。」と聞いてみようと思ったが、「朝ご飯を食べましょう。」といきなり言ってきた。(中略)

少し怖くなってとりあえず食事を食べることにした。



(a) 話し合いを行っている様子



(b) 発表1



(c) 発表2

図6. 認知症の人に対するケア

「これを食べたなら家に帰らなきゃ。職場にも連絡しなくては…。それにしてもここはどこなのですか。とりあえず出口を探さなくては」と思い、歩いてみる。すると、若い人がなにこしながら自分の後をついてくる。なにか薄気味悪い、どうして後をつけてくるのだろう。」(引用：日本認知症ケア学会編、痴呆ケア標準テキスト痴呆ケアの基礎。：ワールドプランニング、2004.70-71)

図6は学生同士が発表を行い、その場面を慈済技術大学看護学部の教員が写真に収めている場面である。事例を題材にした認知症の人の生活場面から、実際にどのように声掛けを行うのか、活発な意見交換がなされた。廣橋ゼミ学生との交流は、互いの文化を知るとともに、共通の視点である Care について改めて学ぶ貴重な機会となった。

IV. 門諾病院ミニセミナー

門諾病院（図7）では、「日台介護セミナー」と題し、



図7. 門諾病院：臺灣基督教門諾會醫療財團法人 門諾醫院臺灣花蓮市970民權路44號



図8. 1部：認知症に対する日本の取り組みについて



図9. 2部「日本式介護講習」



図10. 3部：意見交流・記念写真

門諾醫院・花蓮長期照護發展協會が共催しセミナーを開催した。

1 部「認知症に対する日本の取り組みについて」

担当 菊池小百合

2 部「日本式介護講習」

担当 関口昌利

3 部 意見交流

とした。

【1 部：認知症に対する日本の取り組みについて】(図 8)

パワーポイントを用い、新オレンジプランを中心に概要説明を行った。

【2 部：日本式介護講習】(図 9)

介護の技術を実際の場面にどのように活用したらよいか、またその根拠に関して、車いすとスライディンググローブを用い演習を交えた講義が行われた。

参加者も意欲的に演習に参加し、体験を行う事で、根拠と意義についての理解が深まったと思われる。

【3 部：意見交流・記念写真】

1 部 2 部の講演の後に参加者との意見交流を行った。主な質問として①日本の介護福祉士制度に関して。②介

護福祉士の教育課程に関して。③介護福祉士のキャリアアップと待遇に関して。④介護福祉士自身の保険制度に関して。(介護を行っている場面で、事故が発生した場合、その責任について日本では制度があるのか否か、またその際の対応に関して)⑤介護保険サービスの実際(在宅訪問の方法等)に関して等積極的な質疑が行われた。その中でも特に関心を集めたのが介護福祉士資格に関する内容であった。そこで追加の資料を用い、日本が現在検討を行っている専門介護福祉士に関して補足説明が行われた。

意見交流を通し、日本独自の資格制度である介護福祉士に関して、多くの興味関心が寄せられていることを強く感じた。

V. 2 か所の介護施設見学

台湾の施設介護サービスは、大きく分けて「長期介護機構」「養護機構」「安養機構」に分けられるが⁽¹⁾、今回訪れたのは門諾病院が設立し運営を行っている、「門諾醫院壽靈認知症介護施設(門諾寿豊護理之家(Nursing



図 11. 門諾寿豊護理之家(Nursing Home)

門諾寿豊護理之家(Nursing Home)は、高級リゾートホテルの近隣に位置し、静かな場所に建てられていた。周囲に建物は少なく、広々とした印象であった。



図 12. 受付の様子

(左) 受付で発熱をしていないかチェックする為、体温計を前額部に当てて測定する。(右) 広々とした1階ホール(受付前)に入居者が集まってお茶を飲んでいる。(中央に立っている男性は利用者家族)



図 13. 施設内部



図 14. リクライニング機能付きソファー
(キャスター・テーブル・フットレスト付き)



図 15. 日本語を話せる女性入居者と会話中
日本語で話しかけられた。日本統治下時代を過ごした高齢者は日本語が堪能である。



図 16. 個室 電動ベッドと床頭台
床は木目調のクッションフロア



図 17. 2人部屋 個室・2人部屋・4人部屋の3タイプ。
すべて台湾製電動ベッド



図 18. トイレ・洗面所: 部屋の入口に設置



図 19. 浴室・シャワー浴
(台湾では湯舟に浸かる習慣がない)



図 20. 座位保持: 1階ホール職員詰所前にて

	一	二	三	四	五	六	日
上午	温情禮拜						
下午	開心電影院	歡唱時光	午後團契	益智遊戲			

図 21. 週間スケジュール表



図 22. 手作りの壁掛けカレンダーと時計



図 23. 富康セニアセンター



図 24. 正面玄関

玄関ホールが無いので、玄関庇が大きい。引き戸を入るとロビーになる。



図 25. 入居者の様子

大型画面で台湾のアクション映画を鑑賞中



図 26. 施設内部

廊下・居室とも内装は落ち着いた色調だが、日本と違い木材は使用されていない。



図 27. 居室内部

室温調整は、天井式扇風機と窓のみ。暖房設備は無い。窓は比較的小さく、床面より高い位置にある。モルタル塗りの構造と通気性の問題か、壁一面に結露が目立つ。



図 28. 多床室



図 29. トイレ・シャワー（中央）

洗面台の共有ユニット・洗面台の横に設置してあるのがシャワー。

Home))と民間が運営している「富康老人長期照顧中心(特別養護施設)」であった。

1. 門諾醫院系列の施設見学

研修第3日目

門諾寿豊護理之家(Nursing Home)(図11~22)

門諾寿豊護理之家(Nursing Home)の印象は、施設空間が広く病院を想像させる構造であった。各居室に個人の持ち物は少なく、ホールでほとんどの入居者が過ごす姿が見受けられた。

日本の認知症者に対する環境支援として、グループホーム及びユニット型施設といった、家庭的環境が好ましいといわれているが、台湾は様々な民族が施設生活を送る事から、「広くて明るくて嬉しい」といった家族からの声が聞かれるとの事である。

日本の認知症者に対する視点をそのまま台湾に当てはめることは困難であり、台湾文化を尊重し、認知症の人にとって好ましい環境とはどのようなものかといった検討が必要であると感じた。

2. 富康老人長期照顧中心(Senior Center)

富康セニアセンター(図23~33)は、民間により経営がなされている。建築されている場所は台湾でも富裕層が生活する場所であり、入居費の関係からか2階居室は空室が目立った。

施設内には家庭菜園があり、実際に入居者が作物を育て収穫を体験する等のケアが行われていた。また施設周囲の散歩を行う事も出来、住宅街に立地していることから、社会とのつながりが維持できるのではないかと考えられた。

しかし一方で、台湾一般の建築状況から木材の使用はなく、移動の支援のための介助バーの設置は行われていたが、床に至ってはクッション性に乏しく、転倒時の骨折の危険性を感じた。1か所目の門諾病院系列のNursing Home同様、台湾における認知症者のための環境支援に関しては今後の研究課題と思われる。

VI. まとめ

研修視察をとおして、台湾文化と介護の実情について



図 30. 共有シャワー
浴槽に入る習慣がないため、共有トイレ内でシャワーを浴びる。スペースも狭い。排水設備も不十分。



図 31. 屋内外に設置された
防犯カメラ映像をチェックできる監視システムパネル



図 32. 施設外観
施設周辺は高級住宅街であり、外観は日本の施設と異なる。



図 33. 敷地内には家庭菜園もある。左側の車両はデイサービス送迎車。

知ることができた。文化的特徴を考慮し、今後日本で実施する研修内容に関しては、台湾で実際に導入を検討できる内容で行うことが必要ではないと思われる。特に今回の研修全般を通して、認知症ケアと国家資格である介護福祉士の専門性に対する関心が高かったことから、例えば認知症と民族の生活様式を踏まえたケア及び環境配慮、介護職員の教育に関連した内容等である。

施設・在宅ケアの実際を体験する事、その根拠となる知識と技術の統合を目指した研修内容が必要であると考え。台湾に帰国後、研修生自身が自ら考える事ができるよう、様々な知識と体験を提供していきたい。

謝 辞

滞在期間全般に渡って多くの貴重な体験をさせて頂いた。特に学生及び病院・施設職員及び入居者の皆様との交流は充実した時間であった。貴重な体験をさせて頂いた Asian Wise 有限公司 王珠恵先生、廣橋雅子先生に深く感謝を申し上げます。

注

注1) 2001年9月～2003年9月 建構長期照護體系先導計劃(実験的運用計画)

注2) 第1回2015年1月22日～1月28日(7日間)。第2回2016年1月22日～1月31日(10日間)。それぞれ研修生7名、研修主催者3名の合計10名が訪日。大学での講義・演習、在校生との交流、JA長野会福祉施設実習、佐久地域での文化学習等を行った。

引用文献

(1) 陳真鳴：“台湾の介護サービスとホームヘルパー”，日本台湾学会報，第九号，pp.217-230(2007.5)。